

研究プロジェクト

外国語教育研究センター「研究プロジェクト」は、諸言語および言語教育、またはこれらの言語が用いられる地域の社会・文化を対象とする共同研究および調査で、当センター専任所員を代表研究者として、学内外の研究者と共同で行うものです。期間は一年間で、その研究成果は翌年度の外国語教育研究センター紀要に公表されます。

2010年度研究プロジェクト報告

2010年度に行われた研究プロジェクトは以下の3件です。

1. 関連性の研究（代表研究者：岡田 聡宏）
2. 携帯型オーディオプレーヤーを活用した英語リスニング指導とその評価（代表研究者：熊井 信弘）
3. テキスト計量分析の仏日翻訳への適用の研究（代表研究者：水野 雅司）

それぞれの研究プロジェクトの活動は下記の通りで、研究成果が本号に掲載されています。

* * *

関連性理論の研究

代表研究者：

岡田聡宏（学習院大学外国語教育研究センター准教授）

研究メンバー

井門 亮（群馬大学社会情報学部情報行動学科准教授）

松崎由貴（明治大学政治経済学部兼任講師）

研究の概略：

関連性理論とは、1980年代に Dan Sperber と Deirdre Wilson が提唱した理論である。関連性は、認知効果の大きさと認知効果を得るのに必要な処理コストという2つの要素のバランスの上に成立するものである。つまり、関連性における伝達行為とは、話し手の能力や話し手による伝達内容の選択という点を考慮に入れた上で、最も高い認知効果を持つ刺激を最も低い処理コストで伝達する行為を指す。このような考え方を基礎とする関連性理論は、認知科学の重要な一部を成すもので、コミュニケーション理論として最も注目されている理論の1つであると言える。

本プロジェクトでは、概念の縮小（loosening）と拡張（broadening）を含むアドホック概念（ad hoc concept）の仕組みについて、まず明らかにし、人間のコミュニケーションにおいて、アドホック概念がいかに使用され、解釈されているかという点を中心に考察を行った。

研究の成果として、語レベルに加え、句レベルでもアドホック概念が適用されることについて、イディオムを通して検討し、本号掲載の論文「イディオム解釈とアドホック概念」を執筆した。

携帯型オーディオ・プレーヤーを活用した 英語リスニング指導とその評価

研究代表者：

熊井信弘（外国語教育研究センター教授）

研究メンバー：

萱 忠義（学習院女子大学准教授）

研究の概略：

英語のリスニング力を高めるためには、英語の音声に接する時間をできるだけ多く増やすことが求められる。しかしながら、週1回、年間合計二十数回の授業だけではそのための時間を十分確保することができないのが現状である。そこで、授業時間の他に、通学時間や休憩時間などのすきま時間を活用して、できるだけ多く英語の音声に触れられるように、携帯型オーディオ・プレーヤーを学習者に貸与し、それを英語の授業と連携して1年間活用させることによって、どの程度英語のリスニング能力が伸びるかについて調査を行った。

具体的には、週1回行われる英語の授業の他に、それ以外の時間でもできるだけ英語の音声に触れられるように、学習者に1台ずつ携帯型オーディオ・プレーヤーを貸与し、授業で扱う音声を毎日聴いてシャドーイングをする課題を課した。その際、想定された学習が必ず行われるように自己開発した Moodle 用の Self-Report モジュールで常に報告させ、逐一学習状況が把握できるようにした。また、毎授業時に前時の授業で学習した内容について小テストを行った。1年間このような活動を行った後ポストテスト（CASEC テスト）を行い、プリテスト（CASEC テスト）の得点と比較することにより、英語力とリスニング力の伸長度を測定し分析を行った。その結果、英語力とリスニング力の得点がそれぞれ 0.1% レベルおよび 2% レベルで有意に伸びた。このことにより、オーディオ・プレーヤーをできるだけ長い時間利用し、英語音声に触れる時間を増やすことで、リスニング力はもちろんのこと、英語力も向上することがわ

かった。また、参加者へのアンケート調査からも、こうしたオーディオ・プレーヤーを活用し、英語授業と連携した活動を行ったことについて肯定的な反応が得られ、英語力やリスニング力が伸びたと感じた学習者が多かった。

テキスト計量分析の仏日翻訳への適用の研究

代表研究者：

水野雅司（外国語教育研究センター教授）

研究メンバー：

マルチヌ・カルトン（外国語教育研究センター非常勤講師）

研究の概略：

2009年度に本センター研究プロジェクト「計量分析的手法を用いた翻訳テキストの研究：モーリス・ルブラン『奇巖城』の邦訳について」で実施した研究に基づいて、コンピュータを用いた計量分析的方法を文学作品の翻訳にどのように活用できるかを考察した。

前年度に引き続き Leblanc の *L'Aiguille creuse* のフランス語原文と複数の日本語訳との比較・分析を行いながら、日本語テキストにおいて原文の特徴がどのように表れているかを計量的な観点から調査した。また、Michel Bernard による Nathalie Sarraute の作品に関する統計的手法を用いた研究を参照しながら、フランス語原典の理解における計量分析的手法の有効性を検討し、同時に Sarraute の作品を部分的に翻訳しながら、作品の計量的な特徴に関する知見をどのように役立てることができるかを考察した。

本研究を通して、オリジナルのテキストの計量的な特徴の把握が、作品を理解するうえで決定的な重要性をもちうること、また作品の翻訳においても強力な補助手段となりうることを確認できた。特に、作品全体のキーワードとなる

複数の語の組み合わせや表現の発見、あるいは作家の使用語彙の統計的な特徴の把握などには、コンピュータを用いた計量的な手法が不可欠であり、そのようにして得られた言語的な特徴に関する知識は、オリジナルの言語の日本語における「等価物」を探究するうえで貴重な示唆となりうることが確認できた。

本研究の成果の一部は、本号に水野およびカルトンの共同執筆「ICTと文学研究：電子テキスト時代の読みと翻訳」として掲載されている。

2011 年度研究プロジェクト計画

2011 年度に採択された研究プロジェクトは以下の4件です。

1. モバイル・デバイスを利用したシャドーイング練習のためのネットワークシステムの構築とその活用（代表研究員：熊井 信弘）
2. 関連性理論の研究（代表研究員：岡田 聡宏）
3. Contemporary Film Festivals in Japan（代表研究員：Laura MacGregor）
4. 「越境」文学研究：言語の「境界」、「境界」の言語（代表研究員：水野 雅司）

それぞれの研究計画の内容は下記の通りです。

* * *

Contemporary Film Festivals in Japan

研究代表者：

Laura MacGregor（学習院大学外国語教育研究センター教授）

研究メンバー：

Ma Ran（Ph.D candidate and Course Tutor, University of Hong Kong）

Eija Niskanen（Ph. D. candidate, University of Helsinki; Project Leader
Baltic Sea - Japan Film Project）

研究の目的：

Research on film festivals is of growing interest in academic circles. However, there has been little research in either Japanese or English on film festivals in Japan. The purpose of this project is to investigate the social, political, economic and cultural aspects of a group of selected film festivals in Japan. Research will include, but not be limited to the following areas:

1. funding
2. support for local and international filmmakers, including funding for local and international co-productions
3. symposia and events for filmmakers and the general public
4. public relations and advertising
5. the mission and focus of these festivals and how they are fulfilled

研究内容・方法：

Data will be gathered from online sources, film festival databanks, interviews with key people associated with international film festivals in Japan, interviews with other people involved in the film industry in Japan, and by attending the film festivals themselves.

関連性理論の研究

代表研究者：

岡田聡宏（学習院大学外国語教育研究センター准教授）

研究メンバー：

井門 亮（群馬大学社会情報学部情報行動学科准教授）

松崎由貴（明治大学政治経済学部兼任講師）

研究の目的：

関連性理論とは、1980年代に Dan Sperber と Deirdre Wilson が提唱した理論である。同理論は、認知科学の重要な一部を成し、コミュニケーション理論として最も注目されているものである。これまでのプロジェクトでは、主に Rosa E. Vega Moreno の著書である *Creativity and Convention: The Pragmatics of Everyday Figurative Speech* の精読と議論を通して、修辭的表現やイディオムに使われるアドホック概念について考察を行ってきた。2011年度も引き続き、アドホック概念などの基本的重要な概念の再確認をするとともに、最新の論文や書籍等の考察を通して、最先端の理論への理解を深め、発展的応用研究を目指したい。

研究内容・方法：

定期的に研究会を開き、関連性理論に関する発表及び議論を行う。さらに、この研究会は読書会の性質を併せ持つものとし、最新の論文を含め、重要と思われる論文を精読することによって、その内容を正確に理解し、批判も含めた議論を行う予定である。また、言語学関連の学会への参加はもちろんのこと、関連分野の学会への参加も行いたいと考えている。なお研究の成果については、外国語教育研究センター紀要『言語・文化・社会』に論文として公表する予定である。

モバイル・デバイスを利用したシャドーイング練習のための ネットワークシステムの構築とその活用

研究代表者：

熊井信弘（外国語教育研究センター教授）

研究メンバー：

Paul Daniels（高知工科大学准教授）

研究の目的：

シャドーイング練習のために、学習者のシャドーイング音声をオンラインで録音したり再生したりできるモジュールを、学習管理システム（LMS）である Moodle 用として 2010 年に開発した。これは Voiceshadow モジュールと呼ばれ、インターネットに接続した PC であればどこからでも Moodle 上でシャドーイング練習が可能である。

本プロジェクトではさらに PC 以外の iPhone や iPod Touch、あるいは iPad などのいわゆるモバイル・デバイスからも、このような練習ができるアプリケーションを開発する。これにより、このような機器が手元があれば、いつでも、どこからでも録音した音声を聞いて比較検討しながらシャドーイング練習をすることができ、CALL 教室や自習室などの場所にとらわれない学習環境が提供可能となる。モバイル・デバイス上で録音した音声をインターネットを介して LMS の Moodle と連携させることで、教員が学習者のシャドーイングに関する活動や進捗状況をモニターできるだけでなく、録音音声を他の学習者とシェアすることで学習者同士で相互評価が可能となり、さらに効果的なシャドーイングの学習活動が期待できる。

研究内容・方法：

まず iPhone などのモバイル・デバイスでシャドーイング用の音声を再生・録音できる App（アプリケーション）を開発し、その後、その録音音声を Moodle のデータベースに送りウェブページに表示できるようなモジュールを開発する。これをシャドーイングを中心に行っている授業等で試用し、その使い勝手や効果などについて利用者からフィードバックを得る。

「越境」文学研究：言語の「境界」、「境界」の言語

研究代表者：

水野雅司（学習院大学外国語教育研究センター教授）

研究メンバー：

川口覚子（学習院大学外国語教育研究センター非常勤講師）

中村 容（学習院大学外国語教育研究センター非常勤講師）

研究の目的：

文学における広い意味での「移動」と「境界」の問題、翻訳を含めた文学創造における「越境」の問題を研究する。主に19世紀以降の作家や作品を中心に、「旅」、「放浪」、「追放」、「異郷性」、「場所的違和（dépaysement）」といったテーマを巡る主題論的な読解と同時に、複数の文化・言語を横断する作家や作品を対象に文化論的・翻訳論的観点からの考察を行う。ここでは、フランス語圏の作家や作品だけでなく、文化的・言語的「境界」で創作活動を行う作家やその作品、フランス語への、あるいはフランス語からの翻訳作品なども含まれる。

研究内容・方法：

メンバー各自の専門領域から出発して、文献資料を中心に、文学作品における国籍やジェンダーあるいは文化的アイデンティティの問題、翻訳行為や複数言語使用と文学的創造行為との関係等を考察する。年度内に数回程度の研究会を開いて、研究発表・討議等を行う。研究会の形態として、通常の会合に加え、インターネットを介した電子会議も取り入れる予定である。文献研究に際しても、すでに広く公開されている電子テキストやメンバーが作成した電子テキストを積極的に利用し、近年徐々に普及しつつある情報通信技術を活用した研究方法も取り入れていきたい。